

しらおか歴史物知りシート

No.2-2

こもれびの森・歴史資料展示室

【忠恩寺と岩付(槻)太田氏】

高岩の忠恩寺は、旧鎌倉街道中道沿いに位置する中世寺院で、高岩山覚了院と号し天喜2年(1054)に渋江兼重が開基したと伝えられる。開基時は天台宗の寺で、関東台密四十余院の一つに数えられ、寛元2年(1244)には、宝治合戦へ至る三浦氏排除の流れの中で、鎌倉幕府に命じられ怨敵退散の祈禱を行ったという。明德元年(1390)には、大宥法印が浄土宗に入門、その後浄土宗に改宗したとされる。

室町時代には、岩付(槻)城の太田氏の庇護を受けている。特に4代太田資正は、天文22年(1553)には、門前住人の人足棟別役(家屋税)を免除するなど崇敬の念を寄せ、手厚く護っている。

太田資正棟別免許状 (忠恩寺文書・市指定文化財)

忠恩寺

六月十一日 資正(花押)

忠恩寺の門前人足棟別の事 免許致す
もの也 よつて件のごとし
天文二十二癸丑

《読み下し》



忠恩寺の寺伝を伝える「高岩山由来」(裏面)は、後世の写しと思われるが、市域での岩付太田氏の政策を読み解くうえで非常に興味深い。

忠恩寺は応永19年(1412)に示寂した大誓岍意を開山、岩付太田氏の祖である太田道灌を中興開基とする浄土宗の寺院と伝えるが、これは岩付入城後に太田資家(岩付太田氏初代)等が領国経営策として有力寺社を庇護する中で、元来土着豪族である渋江氏の開基と伝える忠恩寺を、太田道灌中興開基の岩付太田氏所縁の寺として、位置づけし直したかったためではないかと考えられる。

文明10年(1478)に中堂を建立し太田家伝来の薬師尊像を忠恩寺に遷座させたのもこうした施策のなかで読み解くことができる。

資正が門前百姓の棟別役を免除したのも、当時、慈恩寺の僧坊の多くが破戒僧や後北条氏と通じる渋江氏によって私領化され荒廃した状況にあったことから、忠恩寺の寺領内の百姓が他所へ移住することを防ぎ、寺領の開発を促進させる狙いがあったものと思われる。門前の黒印下馬札を書き替えさせたのも民心掌握の意図ではないだろうか。

*示寂：高僧が没すること

高岩山由来 (忠恩寺文書・市指定文化財)



【意識】

高岩山由来

長祿三年（一四五九）己卯三月、太田道灌侯が城下を巡見の時、寺住まいの直道岾円を呼び、寺名の由来を尋ねられたので「天喜二年（一〇五四）甲午、開基は洪江兼重で、大然法印が初めて住持となって以降子孫で続いているといわれています。寛元四年（一二四六）丙午、三浦泰村（前若狭守）の乱の時、鎌倉幕府が関東にある天台密教の四〇程の寺院に怨敵退散を祈願するよう命じましたが、当寺はそのうちの1ヶ寺です。明徳元年（一三九〇）庚午、十五世大宥法印が浄土宗に入門し、修行の後永十九年（二四一一）壬辰、寺を天台宗から浄土宗に改宗しました。」と申し上げました。

その後文明十年（一四七八）戊戌、太田家伝来の薬師尊像の「我を城北高岩村に移すべし」との御告げにより、幕府へ申し、当山に中堂を御建立遷座し、直筆の下馬札を太田家から給わりました。また天文廿二年（一五五三）癸丑、時の岩付城主太田資正侯から門前住人の人足棟別役（税金）免状を給わっています。

永祿二年（一五六〇）庚申、管領上杉輝虎（後の謙信）公が当山を旅の館としたとき、住持の天慶岾全を呼び、寺号の由来を御尋ねにより、右の趣旨を申し上げました。輝虎公これを聞き、天下平安の祈願を命じられました。

永祿二（三カ）
 庚申五月 岾全（花押）



江戸時代の忠恩寺周辺の絵図

太田氏の系譜

